

經學の成立に就いて

著者	鎌田 正
雑誌名	漢文學會々報
巻	13
ページ	2-6
発行年	1951-11-15
URL	http://doi.org/10.15068/00147444

經學の成立に就いて

鎌田正

經學という言葉の典故と、その内容をなす六經の成立するに至る經緯とを考察し、この兩者の關連から、經學の成立年代を明確にして見たいと思う。

一

經學という言葉のはじめて見える文献は漢書である。一般には、兒寬が武帝に見えて經學を説き、その有用なことを知らしめたという次の記事を以て、その始めとしている。

見_レ上_レ詔_レ經學_二上_レ説_レ之_一、從_レ問_レ尙書_一一篇、擢爲_二中大夫_一。(兒寬傳)

この事は儒林傳にも、

寬有_二俊材_一、初見_二武帝_一、語_二經學_一、上曰、吾始以_二尙書_一爲_二樸學_一、弗_レ好、及_レ聞_二寬説_一可_レ觀、乃從_レ寬問_二一篇_一。

とあるから、事實を傳えたものと思われる。兒寬が武帝に經學を説いたのは、元狩三年、張湯が御史大夫となつた時のことであるから、五經博士の設置された建元五年を去る十六年の後である。實際に、經學という言葉の典故がこれを始めとするならば、經學の名稱は、五經博士の設置に依つて成立したとも一應考へられるが、漢書を調査して見ると、更に古い典故がある。經學の語は漢書の中に十二ヶ所ほど見え、その中で最も年代の古い所に關係するものは儒林傳の次の文である。儒林傳は、漢の高祖が天下を一統した結果、次第に儒學が勃興の機運に向つて來たことを述べ、

於是、諸儒始得_二修_二其經藝_一、講_二習大射鄉飲之禮_一。

と記している。これによると、漢初高祖の時代に、既に經學の名稱が存在していたことになるが、この記事は、史記の儒林傳を踏襲したも

ので、史記の儒林傳には、

故漢興、然後諸儒始得_二修_二其經藝_一、講_二習大射鄉飲之禮_一。

とある。即ち史記の經藝を、漢書は經學と改めたのである。藝の字を學に改めた例は他にもあり、史記の儒林傳に「六藝從_レ此缺焉」とあるのを、漢書の儒林傳は、「六學從_レ此缺矣」と改めている。従つて漢書の儒林傳の典故を以て、直ちに高祖の時代に經學の名稱が存在していたと斷定することは早計である。恐らく班固の時代に經學が盛行し、經學の名稱が一般に用いられていたから、史記の經藝を經學に書き改めたものと思われる。史記の經藝に就いても同様に考へることが出来る。史記や漢書等の史書には、作者の生存時代の用語を、未だその用いられなかつた時代に溯らせて用いることが多いから、言葉の典故に就いては、相當吟味を加へる必要がある。

そこで漢書の中で、最も確實な資料と思われるもので、時代の早いものは、鄒陽傳に見える

鄒魯守_二經學_一、齊楚多_二辯知_一、韓魏時有_二奇節_一。

という文である。この文は、景帝の弟に當る梁の孝王が、漢室を繼承せんとする野望を抱いて景帝の怒を買ひ、窮地に陥つた際に、孝王に事えていた鄒陽が、この和解に奔走し、時に智謀の士として令名のあつた齊人王先生に會つて語つた時の、鄒陽自身の言葉である。この事件は梁の孝王の二十九年、景帝の七年に起つたものである。これによると、景帝の時代に既に經學の名稱が成立していた事になり、兒寬が武帝に見えて經學を説いた元狩三年を溯ること三十年である。學術思想の發達から見て、三十年の年数は、決して長いものでないが、刑名黃老の盛行し、未だ經學が國學の地位を得ていない景帝の時代に、既

に經學の名稱が見えるということは、經學成立の上から看過すべきことでないと思う。然らば果して鄒陽傳の記事が信憑できるか否か、之を他の方面から検討して見る必要がある。

二

經學という言葉は、經書の學問であるから、當然「經」という名稱の成立した後に起つたものである。經藝に就いても同様である。

儒家がその教科とする詩・書・禮・樂等の典籍を經と稱したのは荀子に始まる。勸學篇に學問の教科課程を説明して「其數則始乎誦經、終乎讀禮」と述べ、その下に書・詩・禮・樂・春秋の五つの目をあげている。茲にいう經とは、楊倞の注する如く、單に詩・書とのみ見るべきか、それとも禮・樂・春秋をも含めたものか、甚だ疑問であるが、誦經が讀禮と對しており、以下の文に特に禮と詩書とを對して述べているから、荀子のいう經とは、單に詩・書を指すと見る楊倞の注が正しいように思われる。詩書は、儒家の教科の中でも、孔子以來特に重要なものとなつてゐるから、特に之を經と稱したものであるまいか。荀子の書で儒家の典籍を經と稱した確實なものは、この一ヶ所のみで、儒效篇にも詩・書・禮・樂・春秋の目をあげて儒家の教科内容を明らかにしているが、これを經と呼び、或は總稱して五經と呼んだことはなく、況んや經學の名稱は見當らない。思うに、荀子の當時、易を除いた五經の學が儒家の教科として確立していたから、實質的に經學の内容は行われていたが、之を經學と稱することはなかつたのである。そこで、想定を先に言うならば、經學という名稱は、荀子にいう右の教科に易を加えた所謂六經の成立した後に起つたものであるまいか。

三

六經の成立に關連して、當然考うべきことは、五經の成立である。荀子に見る如く、先秦儒家の教科は詩・書・禮・樂・春秋の五科であるか

ら、之に易を加えて六經という教科の成立する前に、易以外の五科を五經と稱してもよいわけであるが、事實はその反對で、六經の成立以後に、五經という名稱が成立しており、その内容は荀子の樂に代つて易を加えたものである。

五經の名稱は、漢書には、武帝紀の「建元五年置五經博士」の記事を始めとして二十八ヶ所も見えてゐるが、史記には樂書に「集會五經家、相與共講習讀之」という一ヶ所のみである。この記事は、郊祀十九章の歌辭が難解にして、一經専門の學者では讀めなかつたから、五經家を集めて讀ませたというもので、時は李延年が協律都尉に任命せられた大初元年である。されば、茲にいう五經家とは、これより約三十年程前の建元五年に設置せられた五經博士に出來する名稱である。従つてこの出典をもつて五經の始めと見ることは出來ない。のみならず、樂書は四庫提要にも言う如く、後に褚少孫の補つたものとすれば、之を司馬遷の原文と見ることは難色がある。五經の名稱は、恐らく五經博士の設置に依つて成立したもので、その内容は樂を除いた易・書・詩・禮・春秋である。樂が立學しなかつたのは、當時樂經の存在しなかつたため、これが、五經の名稱を作る原因をなしたものである。

然らば六經の名稱は何時頃から起つたであろうか。六經の語は、史記には三ヶ所、漢書には十五ヶ所見えてゐる。従つて六經の語は司馬遷の時代には、廣く用いられてゐなかつたと思われるが、その出典の最も古い年代に關係するものと思われるものは、史記の封禪書に「使博士諸生刺六經作王制」という文である。これは文帝の十六年に、博士諸生に命じて六經を資料として王制を作らしめたもので、この文は漢書の郊祀志にもそのまま踏襲されている。右の文は、史記の地の文で、文帝當時の人の言葉として引用したものでないから、文帝の時代に六經の語が成立していたか否かは、直ちに斷定できないが、之を當時の文獻に依つて旁證を求めると、韓嬰の韓詩外傳に、六經の語が二ヶ所見える。韓嬰は、史記の儒林傳に依れば、文帝の時に博士とな

り、景帝の時に常山王の大傳となつてゐるから、略々文・景の時代に活躍した學者である。従つて文景の際に六經の名稱が成立してゐたと考えられるから、史記の封禪書も恐らく本づく所があつたと思われる。

斯くて文帝の頃に六經の名稱が成立してゐたと想定できるが、更にこの想定を可能ならしめる有力な資料は、六經と同一内容の六藝が、文帝時代に既に成立してゐたということである。元來、六藝には二義あつて、一つは周禮の地官大司徒及び保氏に見える禮・樂・射・御・書・數を内容とするもの、他は六經と同一内容をもつものである。前者の意味の六藝は、周禮以外に、先秦の書には一つも見えず、史記・漢書を始めとして、漢代の文獻に見える六藝は、何れも六經の意味のものである。即ち史記には十二ヶ所、漢書には二十一ヶ所ほど見え、その他淮南子の泰族訓、春秋繁露の玉杯篇等にも見え、劉韻の七略に六藝略あり、鄭玄に六藝論等がある。この事から考察すると、六藝は六經よりも廣く用いられた名稱の如く見えるが、この名稱も文帝の時代から表われている。もつとも史記の滑稽傳には、

孔子曰、六藝於治一也、云云、禮以節人、樂以發和、書以道事、詩以達意、易以神化、春秋以道義。

とあり、孔子が禮・樂・書・詩・易・春秋を六藝と呼んでゐた如く見えるが、これは封禪書に「孔子論述六藝」とあり、孔子世家に、孔子が六藝を刪定したことを述べて、「以備王道成六藝」とある如く、孔子が六經を刪定したという、後年漢儒の作りあげた思想に本づくもので、信憑するに足りないものである。孟子が孔子の春秋制作を明言している（滕文公下）以外に、先秦の文獻に於て、孔子が六經に手定を加えたと言ふものは一つもない。孔子の六經刪定説の如きは、漢代に至り、儒家が自己の宗師と仰ぐ孔子の地位を高め、又その教科とする典籍に權威を與えんとして作りあげた説である。さればこの六經刪定説に本づく史記の資料に依つて、六經と同一内容の六藝の教科を、孔子の當時に溯らせることはできない。然らば六藝の成立年代は何時に求める

ことが出来るか。史記・漢書の出典では、武帝以前に溯る資料はないが、賈誼の新書を見ると、六藝の語が見え、且つ書・詩・易・春秋・禮・樂の六つの目が明瞭に出てゐる。賈誼は文帝時代に活躍した大儒であるから、六藝の名稱は、既に文帝時代に存在してゐた事になる。果して然らば、六藝と同一内容の六經の名稱が文帝時代にあるという事は更に怪しむべき事でない。思うに六藝の名稱は、周禮の六藝の名稱に代つて起つたものであり、六經の名稱は、六藝は孔子の手定を経たものという所謂六經刪定説により、特に他と區別して神聖視するために呼んだもので、六藝・六經の名稱は、相前後して起つたものであるまいか。

四

六經は、斯くの如く、漢の文帝時代に既に成立してゐたと思われるが、この成立を先秦時代とする資料に莊子がある。莊子の天下篇に、六經の目をあげてその特質を述べ、天運篇に、孔子が六經を治めたことを述べてゐる。六經が孔子の手定にかかるものとする説の信憑でないことは、既に述べたが、この記事を莊子の原文とすれば、少くとも、莊子の時代に六經の名稱が儒家の教科として存在したことになる。然し莊子のこの二篇は、外篇と雜篇で、莊子の自著でないと思ふことには定説があり、更に次に述べる如く、易が儒家の教科に加わるのは漢代で、易が加わつて六藝六經の名稱が成立したということに依つても、立證できると思ふ。

易が漢代に至つて儒家の教科に加わり、それに依つて六藝六經の名稱が成立したと想定する理由の第一は、先秦の儒家が易を教科として重視しなかつた事、第二の理由は、秦の始皇の焚書の際に易が除外されてゐることである。既述の如く、荀子の勸學篇や儒效篇には、儒家の教科として詩・書・禮・樂・春秋の五科を數えているが、易がその中に見えない。しかも荀子が易を引用している確實なものは、非相篇に一つ所あるのみである。これは儒家としての荀子が、易を重視しなかつ

た事を物語るもので、迷信を排し、讖祥を忌む荀子か、占筮を事とする易を特に好まなかつたとも考えられるが、孟子も易を引用する所がなく、論語には、孔子の學易を物語るものとして、述而篇の「五十以學易云云」の文があるが、これも釋文所引の魯論に依れば、易の字は亦の字となり、孔子と易との關係がなくなる。假りに孔子が易を學んだとしても、孔子が詩・書・禮・樂と共に、易を門人教育の教科として重んじたという所はない。此等の點から考へて、先秦に於ける儒家と易との關係は甚だ稀薄で、易が儒家の教科として重視されなかつた事は明白である。

次に始皇が儒家に對する彈壓ともいへべき焚書を斷行した際に、易を除外した事は、特に注目すべき事である。いかに占筮の書であつても、易が儒家の經典として重要な地位を占めていたならば、恐らく易もその禍を蒙つたもので、この事實から考へても、易は當時儒家の經典として重要なものでなかつたといえる。以上の理由に依り、易が儒家の經典として教科の中に加わつたのは、焚書以後の事であるといわねばならない。しかしして前述の如く、賈誼の新書に六藝の語が見えてゐるから、少くとも文帝の時代には易が儒家の教科に加わつてゐたのである。

思うに、焚書の彈壓に苦杯をなめた儒家は、儒學の復興をはかるに當つて、單なる孔孟への復古の不利なるを悟り、或は道家の思想を入れ、或は致用の實際化を圖る等、種々の面に苦心を拂つたが、特に國家的に保證され、占筮という大衆性に富み、而も思想的深みのある易を新たに教科の中に加えて、その強化と刷新とを圖つたものであるまいか。

以上に依り、莊子の天運・天下の兩篇を以て莊子の自著と見なす事の出来ないことが明白となつたが、更に陸賈の著と傳えられる新語の道基篇に「於是後聖乃定五經明六藝」という記事があり、又經藝の語も見える。これに依ると、漢初高祖の時代に既に五經・六藝の語

があり、史記にいう經藝の語も五經・六藝を内容とする如く見える。然し現本新語の信憑するに足りないことは四庫提要の説く所であるから、茲には一つの資料としてあげるに止める。

五

以上の考察に依り、六藝及び六經の成立するに至る經緯を明らかにしたが、六經の成立は、即ち實質的には經學の成立を意味するものであるから、之を研究の對象とする經學という名稱が續いて起ることは當然の勢である。前に經學の名稱は、景帝の時代に見える事を述べたが、六經が文帝の頃に成立してゐたとすれば、それは毫も怪しむに足らないことで、史記の鄒陽傳の記事は、信憑するに足るものと言ふべきである。斯く、經學の名稱が景帝の時代に見え、六經の成立が文帝の頃にありとすれば、この兩者の關連から、「經學の成立は、文・景の交にあり」といふべきで、經學史上、文・景時代は改めて高く評價されるべきであるまいか。

史記・漢書の儒林傳に見る如く、漢代經學の先驅をなす大儒が、轡を並べて文・景の間に輩出してゐることは、正にこの間の消息を物語るもので、建元五年に五經博士が設置され、經學が國學の地位を得るに至つたのは、獨り公羊家董仲舒の功に歸すべきでなく、文・景の交に經學が成立しその基盤が出来てゐたことに依るであらう。然しながら、經學が名實共に盛行するに至つたのは、五經立學以後の事で、史記に經學の語が一ヶ所も見えないのに、漢書には十二ヶ所もあり、又經學の實際化を物語ると思われる經術という言葉が、史記には僅かに一ヶ所（太史公自序）であるに反し、漢書には三十五ヶ所も多く見えてゐるという事實が、有力に之を立證してゐると思ふ。

〔引用文〕

- (一) 漢書鄒陽傳・兒寬傳・儒林傳 (二ヶ所)・宣帝紀・匡衡傳 (三ヶ所)・張禹傳 (二ヶ所)・孔光傳・翟方進傳。

- (一) 故書者政事之紀也、詩者中聲之所止也、禮者法之大分、類之綱紀也、故學至乎禮而止矣、夫是之謂道徳之極、禮之敬文也、樂之中和也、詩書之博也、春秋之微也、在天地之間者畢矣。(荀子、勸學篇)
- (二) 詩言是其志也、書言是其事也、禮言是其行也、樂言是其和也、春秋言是其微也。(荀子、儒效篇)
- (三) 漢書武帝紀・宣帝紀・平帝紀・儒林傳(七ヶ所)・兒寬傳・楊雄傳贊・劉向傳・劉歆傳(二ヶ所)・王吉傳・鮑宣傳・夏侯始勝傳・夏侯勝傳・李尋傳(三ヶ所)・宣元六王傳(二ヶ所)・莽傳上及下・藝文志(二ヶ所)。
- (四) 史記封禪書・太史公自序・司馬相如傳。
- (五) 漢書武帝紀贊・禮樂志・郊祀志・司馬遷傳及贊・董仲舒傳贊・東方朔傳・楊雄傳・杜欽傳・匡衡傳・王莽傳中(二ヶ所)・藝文志(二ヶ所)・叙傳下。
- (六) 子夏問曰、閑雅何以爲國風始也、孔子曰、閑雅至矣乎、云云、夫六經之策皆歸於汲汲、蓋取之乎閑雅、閑雅之事大矣哉。(韓詩外傳、卷五)
- (七) 儒者儒也、儒之爲言無也、不易之術也、千舉萬變、其道不窮、六經是也(同上)
- (八) 十有二曰、服事、以三鄉三物教萬民而實與之、云云、三曰、六藝、禮樂射御書數。(周禮、地官、大司徒)
- (九) 樂射御書數。(周禮、地官、大司徒)
- (十) 筆諫王惠而發國子、以道乃教之六藝、一曰五禮、二曰六樂、三曰五射、四曰五馭、五曰六書、六曰九數。(周禮、地官、保氏)
- (二) 史記封禪書・孔子世家(二ヶ所)・同贊、伯夷傳、李斯傳贊、滑稽傳、司馬相如傳、儒林傳、太史公自序(三ヶ所)。
- (三) 漢書宣帝紀・藝文志(六ヶ所)・儒林傳・河間獻王傳・董仲舒傳・兒寬傳贊・司馬遷傳(二ヶ所)・劉歆傳(二ヶ所)・王褒傳・鄭弘傳贊・韋玄成傳・匡衡傳・莽傳上・同贊。
- (四) 六藝異科而皆同道、溫惠柔良者、詩之風也、淳龐敦厚者、書之教也、清明條達者、易之義也、恭儉尊讓者、禮之爲也、寬裕簡易者、樂之化也、刺幾辯義者、春秋之靡也、故易之失鬼、樂之失淫、詩之失愚、書之失拘、禮之失佞、春秋之失辭。(淮南子、泰族訓)
- (四) 是故簡六藝以磨養之、詩書序其志、禮樂純其美、易春秋明其知。(春秋繁露、玉杯篇)

- (五) 是故內法六法、外體六行、以與書詩易春秋禮樂六者之術、以爲大義、謂之六藝、令入綴之以自脩、脩成則得六行矣、六行不正、反合六法、藝之所以六者、法六法而體六行、故也。(新書、六術篇)
- (二) 書者此之著者也、詩者此之志者也、易者此之占者也、春秋者比之紀者也、禮者此之節者也、樂者此之樂者也。(新書、道徳說篇)
- (七) 詩以道志、書以道事、禮以道行、樂以道和、易以道陰陽、春秋以道名分。(莊子、天下篇)
- (八) 孔子曰、老聃曰、丘治詩書禮樂易春秋六經、自以爲久矣、云云、老子曰、云云、六經、先王陳迹也。(莊子、天運篇)
- (九) 故易曰、括囊無咎、無譽、腐儒之謂也。(荀子、非相篇)
- (一〇) 漢書律歷志(二ヶ所)・循吏傳・枚乘傳・董仲舒傳・張湯傳・龔遂傳・劉向傳・杜欽傳・杜欽傳(二ヶ所)・朱雲傳・金日磾傳・傳不疑傳・平當傳・鮑宣傳・丙吉傳・夏侯勝傳(二ヶ所)・翼奉傳・張敞傳・諂葛豐傳・鄭望之傳(三ヶ所)・宣元六王傳(四ヶ所)・張禹傳・薛宣傳(二ヶ所)・翟方進傳(二ヶ所)・何武傳。

【參考】

書名	名稱	五經	六經	六藝	經學	經術
史記	一	三	一一	〇	一	
漢書	二八	一五	二二	一二	三五	

○ 出典の調査については、出来るだけ周到を期した積りであるが、遺漏の點は御批正を賜りたいと存じます。